

るからこのような統計にあまり重点をおき過ぎた実験計画は適当ではないのではないかとコメントがあった。これは筆者がこれまで人工降雨の研究の発展のためには統計を無視することもまたこれに頼りすぎることもしくなく常に指摘してきたことと一致する。統計的評価方法と物理的評価方法を改善進歩させ、これを組合せてシーディングの効果を評価することが必要であろう。しかし、前のタシュケントの会議のときでもそうであったが統計に重点を多く研究者と物理的判定に重点を置く研究者の間で今なお同様な議論が繰り返されているのが現状である。

米国の Ackermann は人工気象調節の水理科学的問題という表題で米国でこれまで行われ、また現在行われて

いる人工降雨、人間活動による気象変化の観測計画などについて総合報告を行った。この中で世界各地（日本を含む）で認められているように冬季の雲に対するシーディングでは15～20%の降水量の増加が見出されているが水理学的に見た場合、シーディングによって実際に利用できる水量が増えたという直接の確認はされていないので今後この様な研究が必要であることなどを述べた。

このほか Cotte (カメルン) によるアフリカの人工降雨実験、Goyer (アメリカ) による雷の制御、Kasemir (アメリカ) によるチャフ撒布による電光の制御、Weinstein 等による加熱法による飛行場の消霧、Lhermitte による2台のドップラー・レーダーを用いた降水強度の測定法などの研究発表があった。

南極委員会だより

インフォーマル・ミーティング

「POLEX-SOUTH と JARE (日本南極地域観測隊)」

来る5月18～20日、東京でひらかれる春季大会において、シンポジウム“極気象について”が行われます(19日午後)。これに関連して、南極委員会では、実際に南極地域観測に参加された方々や、これから参加してみたいという方々にお集りいただき、インフォーマル・ミーティングを行うことにしました。ふるってご出席下さ

い。

日時：5月20日(木)夜6～8時

会場：気象庁内(予定)

連絡先：藤井理行

国立極地研究所 Tel. 03-947-5583

173 東京都板橋区加賀 1-9-10

第19期選挙管理委員の交替について

第19期選挙管理委員の人事移動に伴う任地の都合上、下記のとおり交替いたしました。

前 土 田 武 雄 (気象庁海洋課)

新 藤 木 明 光 (気象庁海洋課)

(28ページより続く)

来、予報官の介入も含めて、この方式によるこの図の改

良を進めて行くことは無意味な事ではないと思われる。

(電子計算室 菊地正武)